

121. 昭和58年度 県指定文化財の紹介 その1

建造物

1. 水観寺本堂 1棟 桃山時代(慶長6年)
桁行四間、梁間六間、一重、入母屋造、棧瓦葺、
東向

大津市大門通り 園城寺

水観寺は園城寺五別所の一つで、大門通り北側の一画に境内を構える。重要文化財紙本著色園城寺古図にも、現在地と同じ場所に画かれており、古くより存在していたことがわかる。

現在の水観寺本堂の形式・手法が桃山時代の様式を示しており、「園城寺古記」のなかに慶長6年(1601)水観寺薬師堂建立の記事がみられ、また建物に懸られている鰐口に慶長13年(1608)の刻銘があって、園城寺慶長復興にあたって建てられたものと考えられる。

建物は正面を東向きにして立ち、平面は桁行四間、梁間は六間(ただし南側面は五間)になっているが、北面隅柱より一間前方の柱が、旧隅柱の仕口を有していることから、後世に背面を一間(桁行三間)拡張し

て、仏壇を後退したものである。したがって、当初の北側面梁間は南側面と同じ五間であった。

外陣は梁間二間分を取り、内外陣境の間仕切りをつくる。現在は正面柱間に間に蓐戸を吊り内外陣境は開放にしているが、柱などの痕跡をみると、当初は蓐戸が内外陣境に取り付き、外陣は正面、両側面とも開放になる。

次に内陣平面であるが、桁行四間のうち、南端間に一間に仏間を取り、間仕切りを設けて2室にわかれる。内陣は前述のように仏壇を一間後方に移動しているが、当初の平面は桁行三間、梁間三間にして背面の一間通りが仏壇になる。南端間の仏壇は桁行一間、梁間三間の縦長い小部屋にして、背面寄り一間には当初のままの仏壇構えが残っている。

建物の南側面には、現在不動堂(江戸末期頃)が接続しているが、側柱に風蝕痕が認められないことより、当初から別棟の建物が接していたものと思われる。

柱は面取り方柱にして舟肘木、軒桁を柱前面に蟻落して仕掛けているが、この工法は桃山時代の書院建築に盛んに用いられる。軒は一軒の疎垂木に化粧小舞裏。屋根は入母屋造りの棧瓦葺、妻は冢冑首を組み、破風揉みに格好の良い懸魚をつける。現在、屋根を棧瓦葺にしているが、軒先には柿軒付が残り、軸部、軒廻りが軽快で簡素な住宅風に構成されていることからみると、当初は柿葺(または檜皮葺)であったものと推察できる。

縁は背面を除く3方(正面全面、北側面は前寄り四間、南側面も前寄りの接続建物まで)に取り付き縁板を含めて当初の材料が残っている。

現在、建物はかなり破損しているが、柱・造作などの当初の材料が良く残り当初の形式を容易に推察することができる。外陣を開放にして、民衆との交渉を目的にした平面・形態を残し、



水観寺本堂

正面全景

桃山期の別所の本堂の遺構を知るうえで貴重である。

2. 蓮生寺本堂 1棟 江戸時代(元和元)

桁行16.9m、梁間14.9m、一重、入母屋造、

向拝三間、本瓦葺、南向

附指定 元和元年正月三日の記のあるもの 一枚

守山市三宅町 蓮生寺

蓮生寺は、湖南地方における浄土真宗の布教に、重要な役割を果たした寺院である。

寺伝によれば、蓮如上人は寛正6年(1465)の大谷破却のち、父存如が教化の金森に暫く居住し、道西の誘導をうけて近郷に巡錫した。その折に、三宅の三品源太夫宗道が帰依し、了西と改め、三宅に道場を開いたのが始まりであり、現在、寺は真宗大谷派に属する。

現在の本堂は寺蔵の棟札により、浄土真宗の阿弥陀堂として、元和元年(1615)に再建されたものである。その後の修理としては、享保16年(1731)に内陣と余間後方が拡張され、内外陣境の内法高も変更されている。また、江戸時代末期に、新たに向拝が附加されると共に、母屋正側面の腰高障子の外側に、両折板扉が吊り込まれている。さらに昭和20年代には、建物の建て起しと屋根の葺替が行われた。

この建物は母屋の柱間が桁行七間、梁間五間で、その周囲3方に広縁を巡らし、正面には三間の向拝を設けている。軒は竦垂木小舞打ちとし、屋根は屋だるみの少ない入母屋造本瓦葺である。

内部は外陣・内陣・余間に分割する真宗本堂の平面で、棹縁天井を張り簡素な意匠である。

外陣は中央間三間、両脇間二間の境に一間毎に3本の大面取りの独立した角柱を建て、礼拝のための奥行の深い空間としている。入側縁とはガラス戸引違いで間仕切り、その外側に両折板扉が吊り込まれているが、もとは腰高障子であろう。

内陣と余間は、後世の改造の最も大きい部分で、いずれもその奥行を二間(4.0m)としているが、もとは奥行一間半(3.0m)の浅いものとなる。

内陣は左右の余間より1段高い上段で、内外陣境に両折金障子を吊り込み、来迎壁、後門を設ける形式であるが、もとは一間の仏壇が3つ並ぶ。また、外陣境は襖引違い、

小壁は貫を1筋みせた箆欄間となり、床高も西余間と同高まで下がる。

余間は両方とも上段で、間口二間である。東余間は、その中央に柱を建て、柱間装置を襖引違いとすると共に、天井も最も低く張っている。仏壇は旧規に復すると内陣と同列に並ぶが、東余間のみ一間のものが二つ並び、その高さも他より框の成ほど低い。これらのことから、東余間は西余間より格式の一段低い性格のものと考えられる。

妻飾りは、その部分に鉄板を張り覆っているが、小屋組内には木割の太い冢叔首組が残り、伸びやかな破風を架けている。

この建物は後世の改造により、柱間装置などが部分的に変わっているが、建立当初の部材が要所に残存しており、江戸時代初期における浄土真宗本堂の成立過程を示す遺例として、価値が高いものである。

3. 西徳寺本堂 1棟 江戸時代

桁行16.6m、梁間12.4m、一重、入母屋造、

茅葺、向拝一間、棧瓦葺、妻入、西面に庇付、棧瓦葺、南向

伊香郡木之本町大字赤尾 西徳寺

西徳寺は、湖北を流れる余呉川西方の閑静な山懐に在り、真宗大谷派の末寺である。

寺伝によれば、この地方の郷士である磯野種秀が、仏門に入り休善と号して、文明5年(1473)蓮如上人に帰依し、浄土真宗の道場を建てる。時移り、教善が教如上人裏書の本尊絵像を授かり、この時から西徳寺と号する。

現在の本堂は、7世休円の時建立されたと伝える。



蓮生寺本堂

正側面全景

その後の修理としては、江戸時代末期に内陣・余間が改造され、向拝の新設もこの頃と考えられる。さらに昭和20年(1945)には、外陣東脇間の小屋組・天井廻りを雪害のため修理し、昭和25年(1950)には屋根葺替を行なっている。

この建物は母屋の柱間が桁行七間、梁間五間の規模で、正面に広縁と向拝を設ける。屋根は妻の小さい入母屋造茅葺で、民家風な本堂である。

内部は奥行の深い外陣と内陣・余間に分割する真宗本堂特有の平面である。

外陣は中央間三間、両脇間一間の境に一間毎に、3本の大面取り独立角柱を建て、礼拝のための空間としている。内外陣境より二間手前で虹梁を架け、棹縁天井に変化を付けて見切りをつくり矢来としている。正側面の柱間装置は、いずれもガラス戸引違いであるが、もとは腰高障子となる。なお、両側面は中敷居の外側に、1本引の板戸が立ち風雨を避けている。

内陣と余間は、後世の改造の最も大きい部分であり、内陣と東余間は奥行を約1.7m、西余間は間口を約90cm拡張している。

内陣は、上段で外陣境に両折金障子を吊り込み、来迎壁、後門を設けているが、もとは一間の仏壇が3つ並ぶ形式となる。また、外陣境は襖引違い、小壁は貫を一筋みせた板欄間となり、簡素な意匠である。

余間は両方とも上段であるが、旧規に復すると外陣と同高の下段となる。外陣境は現状どおりの襖引違いで、いずれも4.5帖の部屋となり、後方に仏壇が付く。なお、東余間の仏壇框と天井の高さは、他より低く納めている。これらのことから、東余間は西余間より格式の一段低い性格のものと考えられる。

この建物は、建立年代を証する史料はないが、構造手法から江戸時代中期の建立と考えられる。後世の改造により、柱間装置などが部分的に変わっているが、建立当初の部材が要所に残存しており、17世紀末から18世紀初頭における浄土真宗の惣道場の成立過程を示す遺例として、価値が高いものである。

史跡

1. 千僧供古墳群

近江八幡市千僧供町・長福寺町

供養塚他3基 10,823㎡



西徳寺本堂 正側面全景

近江八幡市街地の南東、国道8号線沿いに所在する。

1. 供養塚は従来円墳とされていたが、調査の結果、後円部に幅6.5m、奥行4mの造り出しを持つ、墳丘長50m、後円部径37m、前方部幅22mの帆立貝式古墳で、堀を含めると全長70mの古墳であることが確認された。墳丘及び主体部は過去2度に及ぶ被掘で消失しているが、葺石を伴う墳丘裾部の遺存状況は良好である。また遺物は多量の埴輪類があり、特に、従来県下で知見の少ない人物、家形、馬、蓋等の形象埴輪類が注目される。埴輪は墳丘側に円筒と朝顔型、蓋を並らべ、外堤に円筒・造り出し対岸に人物・器財埴輪を配していた。なお江戸時代の被掘では鏡、玉類、昭和9年の被掘では横矧板鋸留短甲、直刀類が出土し、後者は現在市指定文化財として大字で保管されている。

2. 住蓮坊古墳は墳丘径53mを有し、堀を含めると径93mにも及ぶ、県下でも屈指の大型円墳である。墳丘は段築の痕を明確にもち、比較的遺存良好であるが主体部は不明である。また外部施設としての葺石等はずもたず、埴輪も確認されていない。なお遺物としては堀跡より古式の須恵器が出土しており築造時期を推定できた。

3. 岩塚は径27.5mの横穴式石室を主体部とする円墳である。堀をもたず、現状は石室が完全に露頭した状況にある。主体部は玄室幅2m、現存石室長11mを有し南に開口している。

4. トギス塚は墳丘、主体部とも大部分消失していて、一部石室材が露頭している。調査の結果、幅1.5m現存石室長5mの南に開口する横穴式石室を主体とする径14mの円墳で、堀を有しない。遺物は石室前庭部に径10~15cmの円礫群とともに須恵器類が出土してお

り築造時期が推定できた。

以上が4基の古墳の状況で、個々の遺存状況は良好とは言い難い。しかし群として判断した場合、当該古墳群は、次のような諸特徴をもっている。

イ. 5世紀中頃から6世紀末～7世紀初頭にかけて、住蓮坊古墳→供養塚→岩塚→トギス塚の順で築かれている。(但し他の3基は未調査で時期不明)。

ロ. 6世紀後半の他の古墳群が周辺丘陵部に占地するのに対し、生産基盤である平野部に占地している。

ハ. 大型円墳、帆立貝式古墳を群中に含む。

ニ. 供養塚は河内番上山古墳とはほぼ類似した企画で築造されている。

ホ. 形象埴輪群(供養塚)を有するとともに、5世紀中頃の初期須恵器を有する(住蓮坊古墳)。

ヘ. 隣接部に白鳳時代寺院跡(千僧供廃寺)が所在し東山道に面している。

ト. 周辺部で東西・南北に方位を持つ、直交する延長100m以上の溝、墨書番付をもつ角井戸、「西殿」とかかれた墨書土器、瓦等が検出されている。

なお、供養塚古墳における家形等の器財埴輪群の出土位置は、従来の墳丘上に立て並べての葬送儀礼と異なり、外堤部で、造り出しに相對峙して行われた可能性が高く、新たな資料として注目される。(千僧供古墳群の写真は、「滋賀文化財だより」74号を参照下さい。)

2. 玄蕃尾城跡

伊香郡余呉町大字柳ヶ瀬字北尾・打谷
69,817m²

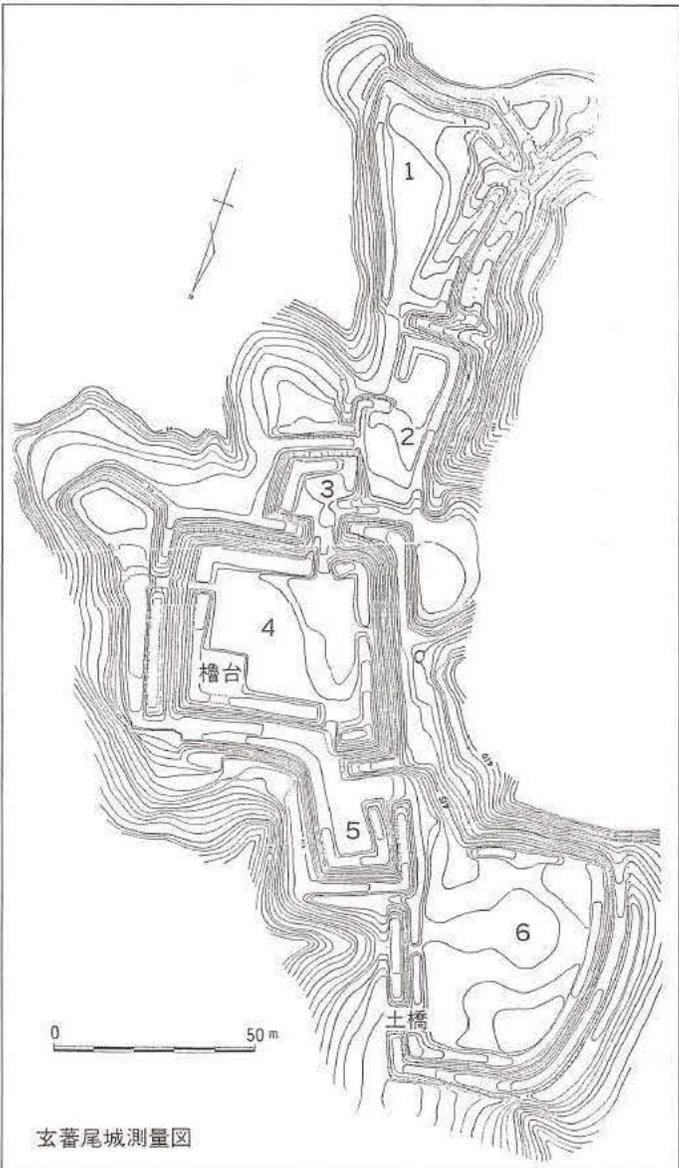
玄蕃尾城は滋賀・福井の県境の柳ヶ瀬山(内中尾山)山上にあり、近江から栃ノ木峠を越え、越前府中へ向かう北国街道と、敦賀へ抜ける若狭街道(刀根越)の両街道をおさえる交通上の要衝の地に位置する。

この城は天正11年(1583)4月の賤ヶ岳合戦の時、柴田勝家の本陣が置かれたのであるが、それ以前には「信長公記」に天正元年(1573)8日、小谷城から退却する朝倉軍が刀根山の嶺で戦いを行ったという記録がある。しかし、城として記述していないことなどから、城郭として整ったものではなかったようである。

城は南北約300m、東西約150mの範囲の尾根上に基本的に6つの郭を連ねてあり、土塁・穴堀を縦横にめぐらした遺構は極めて良好に遺存している。本丸に相当する主郭(4)は約30m×35mのほぼ方形を呈してお

り、北東隅に10m×10m・高さ1mの方形櫓台が見られ、現在2間×2間の礎石が認められる。主郭を囲む高さ1～2mの土塁は四方に切れ、特に南北は喰い違いの虎口となっている。南端の郭(1)は専守防衛型の郭で大手にあたり、(2)は虎口郭、(3)と(5)は馬出し郭となっている。また北端の扇形の郭(6)は兵の駐屯地か物資集積地としての機能を果たしたようである。主郭の北・東・西側には武者走りがあり、東は賤ヶ岳方面を監視する見張り郭へとつづく。これらの郭は土塁にかこまれ、更に外側は幅5～7mの空掘り区切られ、土橋によってつながっている。

(3. 西野水道はNo.89号につづく)



玄蕃尾城測量図